記者の目 女の目

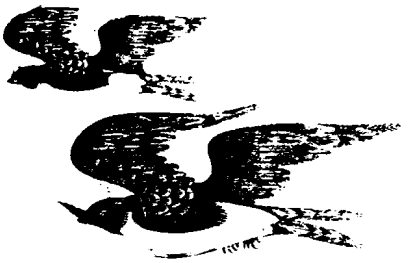
私の主観的取材ノート

下村満子

記者の目 女の目

私の主観的取材ノート

下村満子



〈著者略歴〉
下村　満子（しもむら　みつこ）
東京生まれ。慶応義塾女子高等学校，慶応義塾大学経済学部卒。ニューヨーク大学大学院修士課程終了（経済学専攻）。1965年，朝日新聞社『This Is Japan』編集部，出版計画室などを経て，1972年から『週刊朝日』編集部記者。1980年5月よりアメリカ特派員（『朝日新聞』・『週刊朝日』兼務）。
〈著書〉
『アラビアの王様と王妃たち』『世界の大経営者たち』『世界のトップレディーたち』（共に朝日新聞社）『女のキャリア作戦』（講談社）など。

記者の目・女の目——私の主観的取材ノート——

昭和55年5月31日　第1刷発行

著　者　下村満子
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
〒601　京都市南区西九条北ノ内町11
電　話　075—681—4431
東京事務所　03—295—9211
印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　合資会社村上製本所

©Mituko Simomura 1980 Printed in Japan　乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

記者の目・女の目＊目次

I　女性記者の眼

安っぽい「豊かな心」……8
高校生はなぜ祖母を殺したのか……15
〝進歩〟とは……22
学歴インフレ時代……28
これから企業はどうなるか……35

II　いま世界の女たちは

地に足をつけた女の動き……44
神話を崩すドイツの女性……51
男と女の関係が冷やかになった……60
〝自立した女〟は幸せになれるか……67
アラブの女も脱ぎ始めた……74
やはり甘えている日本の女性たち……80

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅲ　東と西の対話

日本人の「無我の確立」……88
禅が西洋の思想を征するとき……95
未来型人間の条件……104
アラブで考えたこと……111
日本人はたいしたものだなァ……123

Ⅳ　漂う社会・日本

糸の切れたタコ・日本……132
日本国にいかに勝つか……138
努力しないで非難されない方法は……145
首脳会議でなぜ話せないのか……153
世界的なベストセラーを生み出す条件……161

V　復興する社会・中国

〝人間的〟になった中国……170
日々の暮らしぶり……177
本音をしゃべり出した中国人……183
おしゃれへの関心……190

VI　ひきずり出された巨人・西ドイツ

いまドイツでは……200
幻の外交官……210
日本ほど恨まれない理由……219
ドイツ人にとっての「生きがい」……228
ささやかな「自己主張」——あとがきにかえて……239

記者の目・女の目

――私の主観的取材ノート――

I　女性記者の眼

安っぽい「豊かな心」

「満子の心はどれだ?」

子供の頃から、私は時折、一瞬妙な心境におそわれることがあった。

その妙な心境をはじめて経験したのは、たしか、十二、三歳の頃だったと思う。

私は一人で道を歩いていた。その時フッと、

「いま一歩一歩こうして足を動かして歩いているこの私は、いったい誰なのだろう?」

という疑問が、一瞬脳裏をよぎったのである。

「私は誰なのだろう」というのも変な話なのだが、つまり、「今この瞬間、ここにこうしている私という存在」がとても不可思議に思えた、ということだろうか。いったい私は、どこからきたのか、そして、どこへ行くのだろう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人はみな死ぬのだそうだ。だから私も死ぬ。でも、この私が消え去るということは、どういうことなのか。何も無くなること？　でも、いまこうしていろいろ考えている私、私の心はどうなるのだろう。それも無くなる？　とすると、私っていったい何なのだろう。ただの物質のかたまりなのかしら？

これは、もちろん、ほんのつかの間のことであった。次の瞬間、私はもとのごく日常的な自分に返っていた。けれど、それ以来、私には時々こうした一瞬が襲ってくる。時間も空間も超越したような一種の真空地帯にスポッと自分がはまり込む一瞬である。そして「おまえは何者なのか」と問いつめる。

誤解されそうなのでおことわりしておくが、自分がわからなくなるといっても、別に自分の名前を忘れるというようなことではない。そうした〝日常的な〟意味での「私」のことではなく、もっと本源的な意味での「私」に対する疑問なのである。

禅の有名な公案の一つに「父母未生前の自己本来の面目は？」というのがある。平たく言えば、あなたの両親さえまだこの世に生を受けていない時、あなたはいったいどこにどうしていたのか、ということなのだが、私を時折ハッと棒立ちさせる大疑団は、まさしくこのことなのであった。どうしてそうなったのかは、自分でもよくわからない。生まれつきの性格なのか、それとも育った環境からくるのか。

私の父は、われわれ子供たちをつかまえてはよくこんなことをいった。

「満子、満子はどこにいる?」
「ここにいるわ」と私。
「それは、満子のからだじゃないか。満子の心はどこにある?」
「ここ」と、私は心臓のあたりを押える。
「それは満子の心臓だ。心はどれだ。出してごらん?」
父にいわせると、私が指さすものは全部、「満子の〇〇」というように「の」の字のつくものばかりだ、という。ものを見るためには目を使い、聞くためには耳を使う。そしてしゃべるためには口を使うが、「目も耳も口もあくまでも道具だ。見たり、聞いたり、しゃべったりしている。その満子自身はどれか」「悲しいと泣く心、うれしいと喜ぶ心、それはどこにあるか」。父はそういって、私たちを困らせた。まだ小学生であった私たちにとって、それはただのゲームでしかなかった。が、この父の投げかけた問題は、知らぬ間に私の潜在意識に深く刻み込まれていたのかもしれない。
ともかくこの「心」の問題は、その後ずーっと私につきまとってきた。でも、このことを人に話したことはなかった。なぜなら誰一人そんなことには関心がないように見えたからだ。
第一、ついこの間まで、「精神」だの「心」だのといえば、「保守反動」ときめつけられる世の中の風潮であった。唯物論と科学・技術万能思想が幅をきかせ、高度成長だ、レジャー・ブームだと浮かれていた時代に、「心」などの入り込む余地などなかった。

それがどうした風の吹きまわしか、このところにわかに〝心ブーム〟である。新聞や雑誌の見出しにも、やたら「心」という字が増えた。変われば変わるものである。

もちろんそれはそれで、大変喜ばしいことだと思う。われわれがこれまで、あまりにも「物質」に片寄りすぎた生活をしていたことを、今では多くの人が認めている。この点では、ガルブレイス氏も言っているように、資本主義社会も社会主義社会もちっとも変わりはしない。

「心とは何か」ということは、「人間の本性とは何か」ということであり、もしこの問題について解答が得られたら、それからおのずと「人間の幸福とは何か」「人は何のために生きるのか」「生きがいとは?」「死とは?」といったこともわかってくるはずなのだ。そうすれば、当然いま私たちが直面している難問――「人間にとって幸せな社会とか制度」の輪郭も浮び上がってくる。政治の在るべき姿も方向もはっきりしてくるはずである。人間の本質である心の解明は政治、経済、社会、教育、家庭、その他あらゆる人間活動の原点である。

だが、私をがっかりさせるのは、最近の「心の議論」の中味が、いずれもあまりにお粗末かつおざなりだという点である。たいていの場合、ただのお題目として「心」とか「人間性」とかいう文字を並べているだけで、何の説明もない。「物より心を大切に」というけれども、なぜそうなのか。物より心の方が価値があるという証拠はどこにあるのか。書いているご本人がこのことについてわかっていないのだから、読む方が納得するわけがない。

ことに腹が立つのは、政治家たちである。政治家というのは世の流れに敏感だから、この頃

ではネコもしゃくしも「人間性の回復」とか「豊かな心」とかを連発し、「国民の幸せと生きる権利のために、更には人類の未来のために努力する所存であります」などとおっしゃる。

この安っぽい歯の浮くようなセリフをきいていると、冗談じゃないといいたくなる。本当に自分を問いつめて出てきた言葉ではなく〝借りものの言葉〟だから、それこそ、いっこうに「心を打たない」のだ。いったいこの人たちが心の問題でどれほど悩んだというのだろう。

くだらぬ人間も大したことを言う

先日、ある本の中に我が意を得たりという一節があった。『陰騭録の研究』(西澤嘉朗著)という本の序文の中で、安岡正篤氏がこんなことを書いている。

「鸚鵡でも人間らしいものを言う。くだらぬ人間でも大したことが言えるものである。否、大したことほどくだらぬ人間が利用するのに都合が好い場合が少なくない。それだから大したことなのである。無頼漢が天下国家を商売にしたり、淫婦が尼になって殊勝に数珠つまぐったり、奸商が国家に献金したり、佞人が御用学問に時めいたり……殊に大言壮語し、空理空論を弄んで、爺さん婆さんをまごつかせたり、泣かせたりする所謂インテリなるものほど唾棄すべきものはない……」

強烈な一撃である。昭和二十年に書かれたものだが、まるで今書かれたもののように新鮮な響きがある。

いわゆる産業時代がはじまって以来、人類は「富と安楽を達成すれば、その結果、誰もが無制限に幸福になれる」と考えるようになった。だがこの〝新しい宗教〟は衝撃的な挫折に直面している。なぜなら、多くの人々は「すべての欲求の無制限な満足は福利をもたらすものではなく、幸福に至る道でもない」ことに気付きつつあるからだ――エーリッヒ・フロムは『生きるということ』の中でそう言っている。

アルベルト・シュバイツァーは、ノーベル平和賞を受賞した時、こう世界に呼びかけた。

「あえて現状に直面せよ……人間は超人となった……しかし超人間的な力を持ったこの超人は、超人間的な理性の水準にまで高まってはいない。彼の力が大きくなるにつれ、彼はあわれむべき人間となる……超人となればなるほど、自分が非人間的になるという事実に、私たちは良心を奮い起こさなければならない」

再び安岡正篤氏の言葉を引用させていただく。

「自分を知り、自分を尽すことほど難かしいことはない。人は外物を知り、外物を用いても、なかなか自分を知り、自分を用いることは出来ない。まして尽すことなど思いもよらない。自分こそ人にとって最も不可知であり、取扱いにくい難物である……水から電気も出る。乳から織物も薬品も出る。是れ水や乳の命を人間が知って立てたのである。自然科学はその点偉大なる苦心と努力と功徳とを積んだ。それにしては人間の道学、即ち人間の命を知り命を立つべき学問は何と振わぬことであろう」

イラン危機、アフガニスタン問題、エネルギー危機――こうした外に表われた現象については、私たちは異常とも思える反応を示す。なぜこうなったのか、どうすればいいのかということが騒々しく論ぜられる。

が、こうした事態はすべて、人間が生み出したもの、人間の〝心の所産〟にほかならない。

なぜ私たちは、現象のみに心を奪われ、その大もとである「人間の心」の解明には不熱心なのだろうか。

安岡氏の言う通り、科学技術の研究に対する人類の貢献がすばらしい割に、なぜ「人間学」の方は、いっこうに進歩しないのだろうか。いや、進歩どころか退歩さえしている。人間についての深い洞察は、洋の東西を問わず、古人の方がはるかに優れていた。

「八〇年代が物から心への時代」だというなら、少なくとも、エネルギー問題に費やされると同じくらいの情熱が「人間学」にも傾けられてしかるべきではないのか。人間が人間の心を知らずして、どうして人類の救済ができるというのか。人類どころか自分自身の心の救済さえままならない人間が寄り集まって、何が世界平和だというのだろう。どうしてそんな自信たっぷりのことが言えるのだろうと、私には不思議でならない。

古人はこんな歌を詠んでいる。

「心とはいかなるものをいうやらん、墨絵にかきし松風の音」

この心はいかに、である。どなたか教えていただきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com